れ今謂橘なりとあり、是かの密柑のたぐひなり、本草綱目に言所、これに同じ、茅藤果は本艸に見へず、

〔橘品類考〕橘白生葉品類

近世さまゞの化樹を生ず、人々これを以て賞玩することおびたゞし、なかんづく城州男山の麓に此道好事の人ありて、常たちばなの實を植て、七種の化樹となす、この種弘りて所々に化樹を生ず、これを八幡七化といふ、

凡からたちばなの種を植るには、隨分極上の橘をゑらびて植ふべし、常橘といへども、隨分勢力つよく、きづなき實をゑらびて植ゆべし、春のひがんすぎてこれを植、土かげん、

砂五分　但し極上のまいだまりをよしとす

土五分　但し清瘦の土を用ゆべし、こへけある土をきらふ、

凡て菓木のるいは、人氣を受てよく盛なりと、本草綱目に見へたれば、やしき廻り人家の土をよしとす、又人煙遠きところの清瘦の土をもよしとす、花史に陰地を好とあるこれなり、但し種を植て後、土のかわかざるよう心をつくべし、土かわく時は種いたむなり、

四季の内、夏冬は座敷に入て圍ひ、暑寒をいとふべし、さかれども草木は天地の氣を受て育するものなれば、折を見合して夜氣を受露をとりてよし、

大寒の節珍重して箱などに入ることあり、これもよけれども、冬分至て暖氣になす時は、樹自然と春暖の氣を受て、新芽を吹出すことあり、時ならずして芽を吹出す時は、春過て芽をつくといふて、樹心をれることあるものなり、よくゝ勘て暖氣すぎざるよう心得べし、

常橘の實を植て化樹を生せしむる法

常橘の實を植て化樹となすには、人家の廻りにて十ヶ所の土をとり、又人煙遠きところの清瘦